承諾番号22-2991
朝日新聞社に無断で
転載することを禁じます

音楽評

大阪国際フェスティバル
「小曽根真×鈴木優人×大阪フィル」

ピアノ競演 親愛に満ちて

ジャズピアニストの小曽根真と指揮者で鍵盤奏者の鈴木優人が初共演。大阪フィルハーモニー交響楽団と届けた、大阪国際フェスティバル公演を聴いた（9月17日、フェスティバルホール）。

小曽根はジャズ、鈴木はバロック音楽が専門なのだが、プログラムにはそのどちらもがない。小曽根がクラシックを手がけてから、もう20年がたとうとしている。

オケとの共演で全曲披露は国内初だという、ラベル「ピアノ協奏曲」。第1楽章が終わって、やおら小曽根がピアノを弾き続けた。次の楽章の始まりは確かにピアノのソロパートだけれど、どうも様子が違っている。カデンツァがジャズのテイスト満載に挿入されたのだ。いきなり無重力空間に放り出されたようで、一瞬何を聴いていたのかわからなくなったが、小曽根の指先から自在にスイングした音楽が導き出された。その後もオケともども丁々発止で、小気味良い後味ににやり。

モーツァルト「2台のピアノのための協奏曲」では鈴木もピアノの前に陣取り、古典派のスタイルの中で2人のかけ合いが踊り出した。時に枠をはみ出すのはご愛嬌。大阪フィルの演奏とともに、親愛な響きに満ちた時間を過ごすことができた。

最後は、ムソルグスキーの組曲「展覧会の絵」（ラベル編曲）。鈴木はことさらに指揮のテクニックで音楽の連なりを創るタイプではないが、時間軸のあるべき箇所で、あるべきバランスの音が生み出された。もう少し指揮者とオーケストラの踏み込んだやり取りが聴きたかったが、それは共演を重ねてこそ出来上がるものだろう。大阪フィルはトランペットのトップ奏者・篠崎孝の輝かしい音色を筆頭に、どのセクションも求められた音楽に応えた。

普段、クラシック音楽のコンサートに足を運んでいない人も多い様子の客席。終わったあとは拍手喝采で、多くの笑顔が見えた。

（小味渕彦之・音楽評論家）

２台ピアノで競演した小曽根真（右）と鈴木優人＝樋川智昭氏撮影